

1 学校・生徒の概要

(1) 学校規模

設置学科・学級数

生物生産工学科 (L)	1学級	平成14年度1年生
環境土木科 (T)	1学級	
食品科学科 (S)	1学級	
総合学科 (G)	1学級	

生徒数：405名(男子173名、女子232名)

教職員数：50名

(2) 体験活動の観点からみた学校環境

本校は創立81周年の伝統を持つ、島根県石見西部地域で唯一の農業学科(生物生産工学科・環境土木科・食品科学科)と、生活文化・生活福祉系列と食品科学系列をもつ総合学科からなる高校であり、地域に育てられ地域を担う人材を輩出してきた。

教育活動の特徴のひとつとして、授業での実験実習はもとより、専門性を基盤にした幅広い体験実習・地域交流活動があげられる。これら従来の活動を学科を越えて拡大・深化を図ったものが、今回の「豊かな体験活動」である。

(3) 本校における体験活動・地域交流活動の取組

クラス全員がする活動		
1L・1T	1G	2年または3年
豊かな体験活動	産業社会と人間(養護学校との交流・保育実習・高齢者福祉実習等)	・園児との農業交流活動(2年) ・高校1日体験入学の指導(年2回)(2中学全員参加) ・インターンシップ(3日間)



各自の意志でする活動		
(選択授業での体験実習・交流活動)	(農業クラブ活動)	(家庭クラブ活動)
(ボランティア活動)	(JRC部活動)	(先進地農家実習)
		(緑の学園)

(4) 体験活動の観点からみた生徒の実態

素直な生徒が多く、授業の実習等では主体的に活動できる。

生活体験の場が減少し、人との関わりが希薄になっている。また、日常生活において異世代との交流が少ない。

意欲のある生徒やリーダーとなった生徒に対しては、十分な活動の場と受け止め積極的な活動が見られるが、そうでない生徒は、うまくそれらの活動の場を活用していない。

2 1年次の取組

(1) 取組のねらいや内容

取組のねらい

- ・この地域にねぎした産業への体験を通して、地域理解を進めつつ、豊かな心情を養う。
- ・いろいろな人との交流を通して自分を見つめる。
- ・本校と地域の連携を深める。

内容

1年生物生産工学科・環境土木科を対象に、次のような地域の様々な人との交流に関わる体験活動に取り組んだ。

- ・園児との農業交流活動 ・福祉体験活動 ・保育体験活動 ・林業体験活動
- ・地域に根ざした文化体験活動 ・現場体験活動

(2) 教育課程上の位置付け：総合的な学習の時間等（年間7日程度）

(3) 活動の概要（実施にあたり苦労した点や工夫した点）

園児との農業交流体験活動（さつまいもの苗植え、芋掘り、収穫祭）

（畑作り）

- ・ これまでは、農業クラブ役員が中心となって準備をしたものを、2年生全員が園児と一緒に、春はさつまいもの苗植え、秋は芋掘りをして交流してきた。今年度は、学校の農場の荒れ地を耕し、石拾い・堆肥まき・畝立て・マルチ張り・草抜き・茎切り等畑づくりをするところからクラスの生徒全員で取り組んだ。このことにより、準備の大変さを知るとともに、園児が喜ぶ姿に接したとき、うれしさもひとしおであった。

（多人数に対する工夫）

- ・ 近隣4保育園・幼稚園を招いてのさつまいもの苗植えであったので、生徒222人、園児158人という多人数での交流となった。そのため、前半と後半に分け、一方がさつまいもの苗植えをしている時には、他方はガーガーパーク（本校の生徒が作った水鳥公園）で鴨に餌をやったり、ザリガニやめだかがいる大水槽の中へ一緒に入って遊んだり、ササブネを作って浮かしたりした。

（指導者の共通認識）

- ・ 主に農業クラブ顧問と1年学年部教員9名で指導にあたった。指導者同士で共通認識をもつために事前会議を重ねた。

（収穫祭）

- ・ さつまいもの他に、実習で作った米、大根、きのこ等を使って、近くのキャンプ場で収穫祭をした。「自分達で作ったご飯は最高においしかった。」「他のクラスの人との交流ができて良かった。」と感想を述べていた。

高齢者福祉体験活動・保育体験活動

（少人数での実習）

- ・ それぞれ1クラスが6施設に分かれたので、1実習先につき4～8名で体験活動をした。これは、生徒一人一人がきめ細かな指導を受けることができ、生徒にとっても実習先にとっても丁度良い人数であった。ただし、各実習先との事前打ち合わせに時間を要した。また、実習日の決定にあたっては、今年度は予定した日をすべての実習先に受け入れていただけたが、実習先が多くなるとその調整に困難をきたすことも考えられる。

（事前指導・事前準備）

- ・ 実習先から外部講師を招いて体験活動をする上での心構えや注意事項、職業観や仕事内容等、事前に講話をしていただいた。
- ・ 保育体験活動においては、各自が自分の名前を白い布に大きくひらがなで書き、体操服にぬいつけておいた。園児はよく名前を覚えてくれた。

（興味を生かした活動）

- ・ ある施設においては、花壇作りをすることを生徒が提案した。そこで、草花を専門としている本校教員の指導のもとで、本校生徒が育てたローズマリー、コリウス、ピンカを植えた。秋には、有志で苗の植え替えに行った。

（反省会）

- ・ 体験活動の終わりに、生徒と実習先の職員の皆さん、引率教員で、反省会を開いた。生徒は、自分の感想を述べるとともに、友達や指導者の感想を聞くことができ、視野が広がった。また、仕事に対する姿勢ややりがいなど大人の考えを聞く

機会となった。

事後指導

・ 生徒は、体験毎に自己評価表と感想文を書き、自己をふりかえった。（これらは、各自ファイルに綴じておいた。）

・ 各実習先へ生徒の感想文、礼状を出した。

「豊かな体験だより」により、保護者や地域に対する広報に努めた。

体験活動発表会を開き、さらなる意欲化をはかった。

(4) 活動の評価方法

生徒の自分自身の取り組みに対する評価

・ 体験活動毎に、次の自己評価表と感想文により自己評価した。

自 己 評 価 表					
1 年 科 番 氏 名					
項 目	内 容	できた ふう		できない	
		A	B	C	D E
準備・計画	意義・目的を理解することができたか。				
学習への 取り組み	服装・身だしなみはきちんと整えられたか				
	あいさつ、言葉遣いはきちんと整えられたか。				
	迅速な行動がとれたか。（集合、取りかかり等）				
	積極的に参加することができたか。				
	他の人と協力することができたか。				
理 解	後かたづけがきちんとできたか。				
	活動内容を理解することができたか。				
	活動内容に対する興味・関心を持てたか。				

教員による生徒の活動に対する評価

生徒の活動の様子、自己評価表、感想文、指導者からの感想、体験活動発表会などを基に、関心・意欲・態度、表現を観点として、学年末に文章表現による評価をする。

観 点	評 価 基 準
関心・意欲・態度	ア あいさつ、言葉遣いはきちんと行えたか。
	イ 積極的（主体的）に行動できたか。
	ウ 他の人と協力することができたか。
	エ 興味・関心をもてたか。
表現	オ どんなことを感じたか、どんなことに気づいたか

体験活動の内容に対する評価

指導者・教員・生徒とも、概ね良いと評価された。

(指導者)

各体験活動実施後、地域の指導者に、気付いたこと・今後の課題等を書いていただいた。これを「豊かな体験だより」等で生徒や教員に伝えることにより、活動を振り返り、反省したり励みとしたりした。

(教員・生徒)

アンケートを実施した。その中で、豊かな体験活動を実施してどうだったかという質問に対する結果は、

教員・・・良かった(17) 悪かった(0) 両方(3) 無答(1)

生徒・・・良かった(65) 悪かった(3)

となり、「普段できない体験ができて良かった」「いろいろな人と触れ合えて良

かった」という意見が多かった。

(5) 学校の推進体制(学校支援委員会の組織・運営)

本校では教務部の中に豊かな体験活動推進事業の窓口を設け、この体験活動を推進するにあたって、今年度校内推進委員会と学校支援委員会を組織した。

校内推進委員は校長・教頭・教務部長・生徒指導部長・進路指導部長・農場長・各学科長・1年担任・1年学年主任によって構成する。

学校支援委員は、PTA 2名、学校評議員・社会福祉協議会・保育所・益田市教育委員会から各1名、校内の校長・教務部長・農場長・総合学科長・1年学年主任によって構成する。

校内推進委員会により全体の活動計画を立て、学校支援委員会により協力依頼・情報提供・指導・助言をしていただき、1年学年会が中心となって細案を練り、運営委員会・職員会議に図り、多くの教職員や地域指導者の協力を得ながら実施した。それぞれの活動の様子については、「豊かな体験だより」により報告した。そして、1年間の体験活動終了後には、学校支援委員と校内推進委員会において、取組の報告・成果と課題・次年度に向けての展望について話し合った。

特に林業体験活動においては、支援委員に指導員の手配や活動場所の提供・準備等全面的に支援していただいた。

(6) 推進地域としての取組

「益田市豊かな体験活動推進事業モデル校連絡協議会」(以下モデル校)

今年度3回実施(研究協議、情報交換等)

「地域で育む益田の子推進協議会」

全市にわたる組織化を図るため、地域で育む益田の子推進協議会を立ち上げ、モデル校を専門部会として位置付け、各中学校区毎に推進組織を作った。

(7) 活動の成果

- ・ 人とのかかわりにおいて、自分が行ったことが相手に喜んでもらえ嬉しかったという実感を持つことができた。
- ・ 最初は苦手意識があるが、次第に、物や人に対する見方や接し方が変わり、視野が広がっていった。
- ・ 一般社会の常識に接し、自分自身の有り様を振り返る機会になった。(挨拶、服装、礼状、職場の雰囲気)
- ・ 学校の体験活動がきっかけで、地域のボランティア活動に参加する生徒や、保育園へ遊びに行く生徒の光景が見られるようになった。

(8) 今後の課題

- ・ 生徒の自主的・主体的な活動の場を更に広げていく必要がある。
- ・ 保育体験活動を今後、より充実していくためには、体験先の施設の協力態勢を充実させていく必要がある。